

トマス・アクイナス『カテナ・アウレア』
「マタイ福音書」5章1—10節に関する註解

保 井 亮 人 訳

1 イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。そこで、イエスは口を開き、教えられた。「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」(5・1—3)

クリソストムス⁽¹⁾…すべての職人は、その職業に応じて、業の機会を見れば喜ぶ。すなわち、大工は、もし良い木を見れば、その技術による作品のためにそれを切り倒すことを欲する。祭司もまた、人に満ちた教会を見れば、教えることのためにその魂は喜ぶ。そのように、主もまた、大きな群衆を見て、教えることへと駆り立てられたのである。それゆえ、「イエスはこの群衆を見て、山に登られた」と言われている。アウグスティヌス⁽²⁾…あるいは、ここで主は大勢の群衆を避けようとして、そのために山に登り、弟子たちへのみ語ったと考えられる。クリソストムス⁽³⁾…町や市場ではなく、山で孤独に座っていたことよってイエスがわれわれに教えることは、とりわけ哲学的思索や重大なことについての論じるときには、いかなることも見せびらかしのために行わず、騒がしさを避けなければ

ならないということである。レミギウス…主が三つの避難場所を有していたことを知るべきである。それは舟、山、荒れ野であり、イエスは群衆によって圧迫されるたびに、そのうちのどれか一つに向かうのである。ヒエロニムス⁽⁴⁾…素朴な兄弟の少なからぬ者が、主が後統する事柄をオリブの山で教えたと考えているが、事態は決してそうではない。というのも、先行することと後統することから場所はガリラヤであったことが示されるのであり、それをわれわれは、タボル山か、あるいはいかなるものであれ他の高い山であったと見なす。クリソストムス⁽⁵⁾…主が山に登ったのは、第一に、「高い山に登れ」（イザ40・9）というイザヤの預言を成就するためであり、第二に、神の義を教える者が、それを聞く者と同様に、霊的な徳の高みに留まらなければならぬことを示すためである。というのも、谷にいる者が山について語ることはできないからである。もしあなたが地にいるなら、地について語りなさい。もしあなたが天について語ろうと思うなら、天に留まりなさい。あるいは、主が山に登ったのは、真理の奥義を学ぼうとするすべての者が、教会という山へ登らなければならないことを示すためであった。このことについて、預言者は「神の山、肥沃な山」（詩67・16）と言っている。ヒラリウス⁽⁶⁾…あるいは、主が山に登ったのは、父の威光の高みに置かれている者が、天上的な生の掟を制定したからである。アウグスティヌス⁽⁷⁾…あるいは、主が山に登ったのは、神から預言者を通じてユダヤの民に与えられた義の掟—ユダヤの民はこれまで恐れによって拘束されていた—が、より小さいものであることを示すためであり、その子を通じて、ユダヤの民を愛によって解放すべく、より大きな掟を与えるためであった。

「腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た」と続けられている。ヒエロニムス…イエスが立った状態ではなく座った状態で語ったのは、弟子たちがその威厳において輝く彼を認識できなかつたからである。アウグスティヌス⁽⁸⁾…あるいは、座って教えることは、教師の権威に属する。「弟子たちが近くに寄って来た」のは、イエスの言葉

を聞くときに、掟を守ることによって魂において近づく者たちが、身体においてもまたより近くに存在しようとしたためである。ラバヌス…霊的な仕方においては、主が座つたことはその受肉を意味する。というのも、もし主が受肉しなかったとしたら、人類は彼に近づくことができなかつたであろうから。アウグスティヌス⁽⁹⁾…マタイがこの説教が山において座っている主からなされたと言っていることと、ルカが平野において立っている主からなされたと言っていることについては議論の余地がある。それゆえ、この差異はマタイの言うところの主とルカの言うところの主が異なつた者であると思わせる。しかし、キリストが以前すでに述べた何らかのことを他の場所で繰り返したり、以前すでに為したことを再び為したりすることを誰が妨げるだろうか。とはいえ、次のことは起こりうるのである。まず主が山のより高い部分に弟子たちだけとともにいて、そのとき彼らから十二人を選び、その後彼らとともに山からではなく、山の頂そのものから平野、すなわち山の側面にあり多くの者を収容できる平坦な場所へ下り、群衆が彼のもとに集まるまでそこに立っていた。そしてその後主が座つたとき、その弟子たちがより近くに寄つて来たところ、彼らと居合わせた残りの群衆に対して、ある説教を行ったが、それこそ、マタイとルカが語り方は異なつてはいるが、事柄の同一の真理において語っているところのものであつた。

グレゴリウス⁽¹⁰⁾…崇高な教えを述べようとする主について、「口を開き、教えられた」と前もつて言われている。主はずつと以前から預言者の口を開いてきたのである。レミギウス…主が口を開いたと言われているところはどこであれ、その後続く事柄が偉大なものであることに注目すべきである。アウグスティヌス⁽¹¹⁾…あるいは、「口を開いて」と言われているのは、延期そのものによって少し長い説教を行うことが示されているからである。クリソストムス⁽¹²⁾…あるいは、このように言われているのは、主があるときは語ることにおいて口を開いて教えるが、あるときは業によって〔暗黙的に〕言葉を発することによって教えることをあなたが学ぶためである。アウグスティヌス⁽¹³⁾…も

し人が敬虔さと慎重さをもって考察したならば、彼はこの説教のうちにも、有益な道徳に関するかぎりで、キリスト教の完全な様式を見出すだろう。それゆえ、主は次のようにこの説教を締めくくっている。「わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、賢い者に似ている」(マタ7・24)。

アウグステイヌス⁽⁴⁾…哲学的思索の主題は究極的善より他にない。人を至福たらしめるものが究極的善である。それゆえ、主は至福から考察を始めて、「心の貧しい人々は、幸いである」と言っている。アウグステイヌス⁽⁵⁾…霊の高ぶりは大胆ないし傲慢を意味する。また一般に傲慢な者が大きな霊を有していると言われることは正しく、というのも、霊は風と呼ばれるからである。傲慢な者があたかも風によって膨らまされたように思い上がった者と言われるのを知らない者があろうか。それゆえ、ここで、「心の貧しい人々」が謙遜で神を畏れる者、すなわち思い上がった霊を有しない者と理解されるのは正しい。クリソストムス⁽⁶⁾…あるいは、ここで、霊ないし魂が高慢と呼ばれている。しかるに事柄の必要に迫られて欲しながらも謙遜である多くの人々がいるが、これは誉められるべきことではない。それゆえ、選択によつて自らを低める者こそが至福たらしめられるのである。またここで主は徹底的に傲慢を根絶しようとしている。というのも、傲慢はあらゆる悪の根にして源泉だからである。これに対して謙遜が置かれているが、それはあたかもある種の安定した土台のようなものであつて、もしそれが据えられていれば、他のものはその上に堅固な仕方で築かれ、もしそれが破壊されれば、あなたが集めたいかなる善であれ滅びるのである。クリソストムス⁽⁷⁾…それゆえ、明らかな仕方で、「霊において謙遜な者は幸いである」と言われている。その結果、常に神の助けを乞い求める者たちとして、謙遜な者たちを示している。それゆえ、ギリシャ語では、乞食あるいは貧しい者は幸いであると言われている。信仰によつてではなく自然本性的に謙遜である多くの人々がいるが、彼らは神の助けを求めない。ただ信仰にしたがつて謙遜であるところの人々がそうするのである。クリソストムス⁽⁸⁾…あるいは、こ

ここで心の貧しい人々と言われているのは、神の掟を恐れる者たちのことである。このことについて、主はイザヤを通して推賞している。端的に謙遜であること以上のものが何かあるだろうか。というのも、謙遜な者はこの世の生では適度に至福であり、将来の生では満ち溢れる仕方まで至福だからである。アウグスティヌス⁽⁹⁾…傲慢な者は地上の国を求め、天の国は謙遜な者に属する。クリソストムス⁽¹⁰⁾…ちよūd他の悪徳、とりわけ傲慢が人を地獄へと落下させるように、すべての徳、とりわけ謙遜は人を天の国へと導く。というのも、自らを低める者が高められることは適切だからである。ヒエロニムス…あるいは、至福であるのは、心の貧しい者、すなわち聖霊のために自発的に貧しくあるところの者である。アンブロシウス⁽¹¹⁾…神の裁きによって至福は始まり、そこで人間の労苦は評価される。註解…現在の生において貧しい者たちに天の富が約束されることは適切である。

2 「柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。」(5・5)

アンブロシウス⁽¹²⁾…私は素朴な仕方で貧しさに満足しているので、残すは、自らの性向を抑制することである。というのも、もし私が柔和な者でなかったならば、世俗的なものを欠いていることは、私にとって何の役に立つのだろうか。それゆえ、「柔和な人々は、幸いである」と続けられていることは適切である。アウグスティヌス⁽¹³⁾…柔和な人々とは、不正を避け、悪に抵抗するのではなく、むしろ善において悪に打ち勝つ人々のことである。アンブロシウス⁽¹⁴⁾…それゆえ、怒ることのないように、あなたの情動を和らげなさい。また怒っている者は罪を犯さないようにしなさい。というのも、情動を思慮によって抑制することは立派なことだからである。怒りを遠ざけることが、まったく怒らないことよりも小さな徳に属するということはない。たとえしばしば前者がより柔弱で、後者がより強靱であ

ると見なされるとしても。アウグステイヌス^⑧…それゆえ、柔和でない者は、地上的なものや時間的な事物のために衝突し、競争する。しかし、「幸いであるのは柔和な者たちであり、その人たちは地を受け継ぐ」。彼らがそこから取り除かれることはありえないのであり、私は敢えて言うが、かの地については、「わたしの分け前は生ける者の地にある」（詩140・6）と言われている。すなわち、永遠の相続のある種の安定性が表示されており、そこで魂は善き情動によって、ちょうど身体が地においてそうするように、あたかも自分の場所であるかのように休息するのであり、またちょうど身体が地によってそうされるように、自らの食料によって養われるのである。それは聖人たちの休息ないし生命である。クリソストムス^⑨…あるいは、ここで言う地とは、ある者たちが言っているように、この世の生の状態にある限り、虚無性に従属しているのであるから、死者の地である。しかし、腐敗から解放されたとき、それは生ける者の地となるのであり、その結果、死すべき者が不死なる地を受け継ぐのである。地に関して他の解釈が読まれる。それは地を聖人たちの住む天として解釈するものであり、それは生ける者の地と呼ばれる。すなわちそれは冥界に比すれば天であるが、より上級の天に比すれば地である。また他の者たちによれば、われわれの身体は、それが死の下に置かれている間は地であり、死者の地である。しかし、それがキリストの身体の栄光と同じ形のものにされたときには、生ける者の地となるであろう。ヒラリウス^⑩…あるいは、主が柔和な人々に約束するのは、地の、すなわち主が自らの住まいとして撰取した身体の相続である。というのも、われわれの精神の教化によってキリストはわれわれのうちに住むからであり、われわれは主の身体の栄光によって輝かされて主を着るからである。クリソストムス^⑪…あるいは、他の仕方でも解釈できる。キリストはここで霊的なものに感覺的なものを混ぜ合わせている。というのも、柔和な者は自分のものをすべて失うと考えられるので、主はその反対のものを約束して、柔和な者は堅固な仕方でも自分のものを所有すると言っているからである。しかし柔和でない者は、多くの場合、魂と父なる神の遺産を失

う。実際、預言者は、「温和な者たちは地を受け継ぐ」と言っており、上述のことを日常的な言葉によって表現している。註解…また自分自身を所有している柔和な者は、将来父なる神の遺産を所有する。しかるに所有することは持つこと以上のことである。というのも、われわれはただちに失う多くのものを持っているからである。

3 「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。」(5・4)

アンブロシウス⁽⁸⁹⁾…あなたがこのこと、すなわち貧しく柔和であることを達成したならば、自らが罪人であることを思い出し、自らの罪を嘆きなさい。それゆえ、「悲しむ人々は、幸いである」と続けられている。また第三の祝福が罪を嘆く者に属することは適切である。というのも、罪を赦すのは三位一体だからである。ヒラリウス⁽⁹⁰⁾…ここで悲しむ人々と言われているのは、身寄りのないこと、侮辱、断罪を悲しむ人々ではなく、昔の罪を嘆く人々のことである。クリソストムス⁽⁹¹⁾…また自らの罪を嘆く者は、確かに適度な仕方まで至福である。しかし、より至福であるのは他人の罪を嘆く者であり、教師は皆このようであることが望ましい。ヒエロニムス…ここで、悲しみは、自然本性の共通な法則による死者たちではなく、罪と悪徳による死者たちについて述べられている。このようにして、サムエルはサウルについて、パウロは汚れた行為の後に悔い改めることのない人々について、嘆いたのである。クリソストムス⁽⁹²⁾…悲しむ人々の慰めは悲しみが止むことであるので、自らの罪を嘆く者は赦しを得ることによって慰められるであろう。クリソストムス⁽⁹³⁾…またたとえこれらの人々にとって赦しを享受することで十分であるとしても、神は罪の赦しにおいて報いを中止することなく、この世の生と同時に将来において彼らを多くの慰めに与らせるのである。というのも、神の報いは常に労苦よりも大きいからである。クリソストムス⁽⁹⁴⁾…他人の罪を嘆く者は慰められるだろ

う。というのも、彼らは、この世において神の摂理を認識し、滅んだ者たちが神に属することがなかったこと、また神の手から誰かを奪うことができる者は一人もいないことを理解しているからである。彼ら自身については、悲しみが終わると、その至福において喜ぶのである。あるいは他の仕方でも解釈できる。アウゲステイヌス^⑧…悲しみは最愛のものを失ったことについての嘆きである。しかるに神に向きなおる人々は、この世において有していた最愛なるものを失う。というのも、彼らは以前喜んでいたこれらのものについて喜ぶことがないからである。彼らのうちに永遠的なものに対する愛が生じるまで、彼らは少なからぬ悲しみによって傷つけられる。それゆえ、彼らはとりわけ次のことのゆえに慰める者と名付けられる聖霊によって慰められるであろう。すなわち時間的なものを失う人々は、永遠的な喜びを享受するのである。それゆえ、「その人たちは慰められる」と言われている。註解…あるいは、悲しみによって二つの種類の苦しみが理解される。すなわち、この世の不幸と天上的なものの欠如である。それゆえ、カレブの娘は上と下の溜池を求めた。このような悲しみを有するのは、ただ貧しい者と柔和な者のみであって、それは彼らが世を愛さず、世のみじめさを認識し、それゆえ、天を欲求するからである。それゆえ、悲しむ者たちに慰めが約束されているのは適切であり、現在の生において悲しむ者は、将来の生において喜ぶのである。しかるに悲しむ者に対する報いは貧しい者や柔和な者に対するそれに優る。というのも、天の国において喜ぶことはそれを持つことや所有すること以上だからである。なぜなら、われわれは多くのものを悲しみとともに所有しているからである。クリソストムス^⑨…注目すべきは、主がこの至福を単純な仕方ではなく非常に強調して述べていることである。それゆえ、悲しむ人々ではなく、「嘆き悲しむ人々は」と言われている。というのも、この教えは全哲学にとつての教訓だからである。すなわち、もし息子や隣人の死を嘆く者がいれば、彼はその悲しみの全期間にわたって、金銭や名誉への愛によつてとらわれることもなく、嫉妬に苦しめられることもなく、不正によつてかき乱されることもなく、他の悪徳に

陥ることもないが、それは彼がただ悲しみのみに引き渡されているからである。自分の罪を嘆く者は、それはふさわしいことであるがゆえに、よりいっそう高い哲学を示すことになる。

4 「義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。」(5・6)

アンブロシウス⁸⁷⁾…私は過失について嘆いた後に、義に飢え渴き始める。というのも、重い病気にかかっている病人は飢えることがないからである。それゆえ、「義に飢え渴く人々は、幸いである」と続けられている。ヒエロニムス…義を欲することがわれわれにとって十分であるのは、われわれが義に飢えるかぎりにおいてである。その結果、この範例の下にわれわれが理解するのは、われわれは決して十分に義なる者ではなく、常に義の業に飢えていなければならないということである。クリソストムス⁸⁸⁾…人間が善そのものに対する愛から行うのではないすべての善は、神に喜ばれるものではない。神の義にしたがって振る舞うことを望む者が義に飢えるものであり、義に関する知を得ようと欲する者が義に渴く者である。クリソストムス⁸⁹⁾…イエスは義と言うとき、一般的義か、あるいは食欲に対立するところの特殊的義について述べている。イエスは憐れみについて語るべく、いかに憐れむべきかをあらかじめ示している。すなわち、それは強奪によるのでも食欲によるのでもない。またそれゆえ、食欲に固有なものである飢えと渴きを義に帰しているのである。ヒラリウス⁹⁰⁾…義に飢え渴く者たちに至福が与えられるのは、神の教えにまで拡張された聖人たちの渴望が天において完全に充足せしめられることを意味している。そしてこのことが、「その人たちは満たされる」と言われていることの意味である。クリソストムス⁹¹⁾…すなわち、報いを与える神の寛大さよってである。というのも、神による報酬は聖人たちの願望よりも大きいからである。アウグスティヌス⁹²⁾…あるいは、

彼らは現在の生において主が次のように述べているかの食料によって満たされるのである。「わたしの食べ物とは、わたしの父の御心を行うことである」(ヨハ4・34)。すなわち義がそれである。また彼らは次のように言われている水の水によってもまた満たされるのである。「わたしが与える水はその人の内ですべての泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」(ヨハ4・14)。クリソストムス⁽⁴³⁾…あるいは、主は再び感覚的な報酬を置いている。貪欲は非常に多くの人々を豊かにすると思われているので、このことが矛盾するものであることを示して、むしろ義こそがよりいっそうそれを保証すると述べている。というのも、義を愛する者は最も安全な仕方ですべてのものを所有するからである。

5 「憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。」(5・7)

註解…義と憐れみは、一方が他方によって和らげられるべく結合している。というのも、憐れみのない義は残酷であり、義のない憐れみは柔弱だからである。それゆえ、義の後に憐れみについて、「憐れみ深い人々は、幸いである」と付加されている。レミギウス…悲しい心を有している者が憐れみ深い者と言われる。というのも、彼は他人の不幸をあたかも自らのもののように見なし、他人の悪についてあたかも自らのもののように悲しむからである。ヒエロニムス…憐れみはここで、施しにおいてのみならず、兄弟のすべての罪においてもまた理解される。というのも、われわれは他人の重荷を担うべきだからである。アウグスティヌス⁽⁴⁴⁾…不幸な人々を助ける者たちが至福であると言われるのは、不幸から解放されるという仕方によって報い返されるからである。それゆえ、「その人たちは憐れみを受ける」と続けられている。ヒラリウス⁽⁴⁵⁾…神はすべての人々に対するわれわれの親切の感情を非常に喜ばれるので、その憐れみを憐れみ深い者にもみそそうとされる。クリソストムス⁽⁴⁶⁾…報いは均等であるように思われる

が、それはよりいっそう大きなものである。というのも、人間的な憐れみと神の憐れみとは等しくないからである。註解…それゆえ、憐れみ深い者に憐れみが与えられるのは正当であるが、彼らはそれに値するより以上の憐れみを受けとるのである。ちょうど満足以上のものを有する者が単に満足に足るものを有する者よりも多く受けとるように、憐れみの栄光は先行する諸徳の栄光以上のものである。

6 「心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。」(5・8)

アンブロシウス⁽⁴⁾…憐れみを与える者は、もし純粋な心で憐れむのでなければ、憐れみを失う。というのも、もし見せびらかしを求めるならば、いかなる結実もないからである。それゆえ、「心の清い人々は」と続けられている。註解…心の純粋さが第六番目の位置に置かれているのは適切である。というのも、第六日目に人間は神の似像にかたどって造られたからである。神の似像は人間のうちにありながら罪によって暗くされていたが、恩恵によって純粋な心のうちに再び形成されたのである。「心の純粋さが」すでに述べられた諸徳の後に続けられているのは正当であり、それはもしそれらが先行しなければ、純粋な心が人間のうちに造られることはなかったからである。クリソストムス⁽⁴⁾…ここで純粋な人々と言われているのは、あるいは完全な徳を有しいかなる悪意にも自覚のない者たちか、あるいは禁欲的生活を送っている者たちのことである。禁欲的生活は神を見るために最も必要とされるものであり、それは次のパウロの言葉によっている。「すべての人との平和を、また聖なる生活を追い求めなさい。聖なる生活を抜きにして、誰も神を見ることはできません」(ヘブ12・14)。確かに憐れむものの恥ずべきことを行っている多くの者がいるので、主は第一のこと、すなわち憐れむことでは十分ではないことを示して、心の純粋さをこれに対置してい

る。ヒエロニムス…神は純粹な者であるので、純粹な心によつて求められる。というのも、神の神殿は汚されること
 がありえないからである。そしてこのことが、「その人たちは神を見る」と言われていることの意味である。クリソ
 ストムス⁽⁴⁹⁾…すべての義を行い考察する者は、その精神によつて神を見るだろう。というのも、義は神の似姿であ
 り、神は義だからである。それゆえ、人は自らを悪から引き抜き善を行うことによつて神を見るだろう。それは人間
 の受容性にしたがつて、わずかであるかもしれないし、十分であるかもしれない。また時々であるかもしれない、常
 にであるかもしれない。しかし将来の生においては、心の清い者は顔と顔を合わせて神を見るのであり、この世にお
 いてのように鏡を通して謎のような仕方によつてではない。アウグスティヌス⁽⁵⁰⁾…この外的な目によつて神を見よう
 と求める者は愚かである。というのも、ちょうど他の箇所において、「単一心で神を求めよ」（知1・1）と書かれ
 ているように、神は心によつて見られるからである。単一心とは純粹な心のことである。アウグスティヌス⁽⁵¹⁾も
 し靈的な身体における靈的な目そのものもまた、今われわれが有している目と同じだけのことしかできないとすれ
 ば、疑いなく、それらによつて神を見ることは不可能である。アウグスティヌス⁽⁵²⁾…この見神は信仰の報いである。
 この報いに対して、ちょうど「神は彼らの心を信仰によつて清めた」と書かれているように、信仰によつて心は清め
 られる。このことは、次の言葉によつて最もよく証明される。「心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見
 る」。アウグスティヌス⁽⁵³⁾…神を見る者は、死すべき仕方では身体的な感覚によつて生きているこの生を生きることは
 できない。また誰であれ、この生から完全に退いて死ぬか、あるいは完全に身体から離脱するか、あるいはちょうど
 使徒が言っているように（Ⅱコリ12・2）、身体の内にあるか外にあるか分からないと正當に言えるところまで肉的
 感覚から疎遠にならない限り、人はかの見神にまで引き上げられることはない。註解…最初の者たちよりもこれらの
 者たちの方がより大きな報いを有している。それはちょうど王の宮廷で食事をするだけでなく、王の顔をも見る者に

例えられる。

7 「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」(5・9)

アンブロシウス⁶⁴…もしあなたがあなたの内面をあらゆる罪の汚れからきれいにしたいと思うなら、あなたの情動から不和や争いが生じないように、あなたから平和であることを始め、そのようにして、他の者たちに平和を与えなさい。それゆえ、「平和を実現する人々は、幸いである」と続けられている。アウグスティヌス⁶⁵…平和は秩序の静けさである。しかるに秩序とは、等しいものと等しくないものいずれにもその場所を与える状態である。ちょうど喜ぶことを欲しない者が誰もいないように、平和を有することを欲しない者は誰もいない。実際、戦争を欲する者たちが求めているのは、戦うことによつて栄光ある平和に至ること以外の何ものでもないのである。ヒエロニムス…平和を実現する者は幸いであると言われているが、それはまず自らの心において、次に不和の兄弟たちの間に平和をもたらす人々のことである。というのも、あなたの魂において悪徳の争いがあるにもかかわらず、他の者たちがあなたによつて平和を得たとして何の益があるのか。アウグスティヌス⁶⁶…自分自身において平和を実現する者とは、自分の魂のすべての運動を鎮めて理性に従属させ、肉的な欲望に打ち勝つ者のことである。これらの者のうちに神の国は生じ、そこにおいてはすべてが次のように秩序づけられている。すなわち人間のうちで主要にして卓越した部分が、われわれと獣に共通な反抗する残りの部分を支配し、人間のうちで卓越した部分、すなわち精神ないし理性そのものがより優れたもの、すなわち真理そのものである神の子に従属するようにである。というのも、上級のものに従属するのでなければ、下級のを支配することはできないからである。そしてこれが、地上において善き意志を有する

人間に与えられる平和である。アウグステイヌス⁶⁷…この世の生において、精神の法に反抗する法を肢体のうちにま
 ったく有しないということは、いかなる者に対しても起こりえない。しかし今、平和を実現する者は肉の欲望を支配
 することによってこのことを行うのであり、その結果彼は時として完全な平和へと至る。クリソストムス⁶⁸…他の者
 に対して平和を実現する者とは、ただ敵を平和において和解させる者だけにとどまらず、悪を忘れて平和を愛する者
 もまたそうである。というのも、言葉のうちだけでなく心のうちに置かれるかの平和は至福なるものだからである。
 平和を愛する者は平和の子である。ヒラリウス⁶⁹…平和を実現する者の至福は、神の養子にされるといふ報いであ
 る。それゆえ、「その人たちは神の子と呼ばれる」と言われている。すべての者の父はわれわれの神であり、もしわ
 れわれが兄弟的な愛の平和によって互いに生活していなければ、われわれがそれ以外の仕方で神の家族の名称によつ
 て呼ばれることは許されないであろう。クリソストムス⁶⁹…あるいは、互いに争うことなく、不和である他の者たち
 を一致へと呼び戻す者が平和を実現する者であると言われるとき、彼らはまた正当にも神の子らと呼ばれる。とい
 うのも、離れているものを結びつけ、争うものを調停することは、「神の」独り子の主要な業だからである。アウグス
 テイヌス⁶⁹…あるいは、平和のうちには完全性が存するので、そこでは抵抗するものが何もない。平和を実現する者
 が神の子と言われるのは、彼らのうちの何ものも神に抵抗することがないからである。いずれにせよ、神の子は父に
 似たようにならない。註解…それゆえ、平和を実現する者は最大の尊厳を有する。それはちょうど、王
 の子が王の家のうちで最高の者であると言われるのと同様である。この至福が第七番目の場所に置かれているのは、
 六日間の時が過ぎて、真の休息である安息日に平和が与えられるからである。

8 「義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」(5・10)

クリソストムス⁶³⁾…平和を実現する者たちの平和が述べられた後に、常に自らの平和を求めることが善であると思われぬように、「義のために迫害される人々は、幸いである」と付加されている。このことは、徳のために、他の者を守るために、敬虔のために起こるが、実際、魂のすべての徳として義が置かれるのが常である。アウグスティヌス⁶⁴⁾…人間の内部で平和が立てられ堅固にされた後に、外へと遣わされた者は、あらゆる迫害を外部で引き起こし、それをくぐり抜ける。こうして彼は、神のもとにある栄光を増大させる。ヒエロニムス…明瞭に「義のために」と付加されている。というのも、自らの罪のゆえに迫害を蒙っている者が多くいるが、彼らは義人ではないからである。また同時に考察すべきことは、真の割礼の第八番目の至福が殉教によつて締めくくられていることである。クリソストムス⁶⁵⁾…異邦人によつて迫害を蒙る者は幸いであると言われているのは、偶像を崇拜しないことのゆえに迫害を蒙る者のみが至福であるとあなたが思わないようにである。それゆえ、真理を見捨てないことのゆえに異端者から迫害を受ける者は幸いである。というのも、彼は義のために迫害を受けるからである。しかし、もしキリスト者と思われている有力者のうちの誰かが、おそらくその罪のゆえにあなたによつて矯正されたときに、あなたを迫害しようとするならば、あなたは洗礼者ヨハネと同様に至福である。もし自国民によつて殺された預言者が殉教者であることが確かならば、神のために何かを蒙る者は、たとえそれが自国民からのものであつても、疑いなく殉教の報いを有する。またそれゆえ、聖書は迫害する人物を述べず、迫害の原因のみに言及しているのであり、その結果あなたは、誰があなたを迫害するかではなく、何ゆえに迫害するかに注目するのである。ヒラリウス⁶⁶⁾…このようにして、最後に

至福に数えられたのは、義にして好意的な愛であるキリストのためにすべてに耐える人々である。それゆえ、この世の軽蔑において心の貧しい人々に天の国は保たれ、「天の国はその人たちのものである」と言われている。アウグスティヌス⁶⁶…あるいは、第八番目の至福はあたかも先頭に戻るかのようである。というのも、それは完成されたものを示しているからである。それゆえ、第一番目と第八番目の至福においては、天の国が言及されている。すなわち七つの至福は完成するところのものであり、第八番目の至福は完全なものを明らかにしている。その結果、この最後の段階によって残りの至福は完成され、それはあたかも再び始められるかのようである。アンブロシウス⁶⁷…あるいは他の仕方でも解釈できる。天の国は第一に身体からの解放において聖人たちに提示され、第二に復活の後に彼らはキリストとともに存在する。復活の後に、あなたは死から解放されて、自らの地を所有し始める。そして、その所有において、あなたは慰めを見出す。慰めに喜びが続く、喜びに神の憐れみが続く。主は自らが憐れむ者を呼び、そのようにして呼ばれた者は、呼ぶ者である主を見る。主を見る者は、神的出生の法のうちに取り入れられて、ついに神の子として天の国の富を喜ぶ。それゆえ、「この過程は」第一の至福において始められ、第八の至福において完成される。クリソストムス⁶⁸…もしあなたがそれぞれの至福において御国について聞くことがないとしても、驚いてはならない。というのも、「慰められる」、「憐れみを受ける」等々と言われるとき、これらすべてによって、あなたがいかなる感覚的なものをも期待することがないように、他ならぬ天の国が遠回しに示唆されているからである。実際、この世の生とともに失われるものによって飾られている者は至福ではない。アウグスティヌス⁶⁹…これらの文章の数に注目すべきである。というのも、これら七つの段階に、イザヤが述べる聖霊の七つの働きが一致しているからである。聖霊の働きは最高からのものであり、これらの段階は最下からのものであるにしても。すなわち、前者においては最下へと下る神の子が、後者においては最下から神の似像へと上昇する人間が教えられている。これらにおいて、第一

のものは恐れであり、それは謙遜な人間にふさわしい。彼らについて、「心の貧しい人々は幸いである」と言われ、それはすなわち、高みを味わうことなく、「神を」恐れる人々ということである。第二は敬虔であり、これは柔和な者に適合する。敬虔に求め、敬意を表し、非難することなく、抵抗することもない者が柔和な者となる。第三は知識であり、これは悲しむ者に適合する。彼は〔以前〕善として求めていたところのいかなる悪によつて今は征服されているのかを学んだのである。第四は剛毅であり、これは飢え渴く者に適合する。というのも、眞の善について喜ぶことを望む者は、地上的なものから離れることを欲して労苦するからである。第五は思慮であり、これは憐れみ深い者に適合する。というのも、これほどの悪から自らを引き抜き、他人を許し、憐れみを与えることは唯一の救済策だからである。第六は知解であり、これは心の清い者に適合する。彼は清められた目によつて、目が見ることのできないところのものを見ることができると。第七は知恵であり、これは平和を実現する者に適合する。彼のうちには〔神に〕反抗するいかなる運動もなく、彼は靈に従う。一つの報酬、すなわち天の国が様々な仕方で言及されている。第一の至福においては、当然のごとく、天の国が置かれているが、これは完全な知恵の始めである。あたかも「知恵の始めは主への恐れである」(詩110・10)と言われているかのように。父の証しを敬虔に求める者として、柔和な者には相続が、何を失い、何において沈められていたかを知る者として、悲しむ者には慰めが、救済のために労苦する者に回復が与えられるように、飢えるものには満足が、自らが示したところのものが示されるために最善の思慮を用いる者として、憐れむ者には憐れみが、永遠的なものを知解するために純粹な目を持つている者として、心の清い者には神を見る能力が、平和を実現する者には神の似像がそれぞれ与えられる。これらの報いは、ちょうどわれわれが使徒において成就したと信じているように、この世の生において成就しうるものである。この世の生の後に約束されていることについては、いかなる言葉によつても説明されえない。

- 註
- (1) Super Math. (Op. imperf.), hom. 9.
 - (2) De cons. evang., 1, 19.
 - (3) In Math., hom. 15.
 - (4) In Math., c. 5.
 - (5) Super Math. (Op. imperf.), hom. 9.
 - (6) In Math., can. 4.
 - (7) De serm. Dom., 1, 1.
 - (8) De serm. Dom., 1, 1.
 - (9) De cons. evang., 1, 19.
 - (10) Moralium, 1, 4.
 - (11) De serm. Dom., 1, 1.
 - (12) In Math., hom. 15.
 - (13) De serm. Dom., 1, 1.
 - (14) De civ. Dei, 19, 1.
 - (15) De serm. Dom., 1, 2.
 - (16) In Math., hom. 15.
 - (17) Super Math. (Op. imperf.), hom. 9.
 - (18) In Math., hom. 15.
 - (19) De serm. Dom., 1, 2.
 - (20) Super Math. (Op. imperf.), hom. 9.
 - (21) De offic., 1, 16.
 - (22) Super Lucam, 1, 4.
 - (23) De serm. Dom., 1, 3.

- (24) Super Lucam, 1. 4.
- (25) De serm. Dom., 1, 3.
- (26) Super Math. (Op. imperf.), hom. 9.
- (27) In Math., can. 4.
- (28) In Math., hom. 15.
- (29) Super Lucam, 1. 4.
- (30) In Math., can. 4.
- (31) Super Math. (Op. imperf.), hom. 9.
- (32) Super Math. (Op. imperf.), hom. 9.
- (33) In Math., hom. 15.
- (34) Super Math. (Op. imperf.), hom. 9.
- (35) De serm. Dom., 1, 4.
- (36) In Math., hom. 15.
- (37) Super Lucam, 1. 4.
- (38) Super Math. (Op. imperf.), hom. 9.
- (39) In Math., hom. 15.
- (40) In Math., can. 4.
- (41) Super Math. (Op. imperf.), hom. 9.
- (42) De serm. Dom., 1. 2.
- (43) In Math., hom. 15.
- (44) De serm. Dom., 1, 6.
- (45) In Math., can. 4.
- (46) In Math., hom. 15.
- (47) Super Lucam, 1. 4.

- (48) In Math., hom. 15.
- (49) Super Math. (Op. imperf.), hom. 9.
- (50) De serm. Dom., 1, 7.
- (51) De civ. Dei, 22, 29.
- (52) De Trin., 1, 8 et 13.
- (53) Super Gen. ad Iit., 12, 25.
- (54) Super Lucam, 1, 4.
- (55) De civ. Dei, 19, 13.
- (56) De serm. Dom., 1, 8.
- (57) In Lib. retract., 1, 19.
- (58) Super Math. (Op. imperf.), hom. 9.
In Math., can. 4.
- (59) In Math., can. 4.
- (60) In Math., hom. 15.
- (61) De serm. Dom., 1, 8.
- (62) In Math., hom. 15.
- (63) De serm. Dom., 1, 8.
- (64) Super Math. (Op. imperf.), hom. 9.
In Math., can. 4.
- (65) In Math., can. 4.
- (66) De serm. Dom., 1, 9.
- (67) Super Lucam, 1, 4.
- (68) In Math., hom. 15.
- (69) De serm. Dom., 1, 9.